昭和二十六年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第二十二號）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈光

第三卷・第一號

目次

太子憲法第一・二・十條……（1）
聖德太子の和の悲願……社說（2）
不和に対する世尊の慈訓……花田正夫（8）
善人と惡人……福島政雄（13）

聖徳太子憲法（第一、第二、第十條）

一、和を以て貴と爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆党あり、亦さとれる者すくなし。これを以て或は君父に順はず、たちまち隣里にたがふ、然れども上和ぎ下睦びて、事をあげつらはんにかなひぬるときには、則ち事理おのづからに通る。何事か成らざらん。

二、篤く三宝を敬へ。三宝は佛・法・僧なり。則ち四生の終帰、萬国の極宗なり。何の世何の人かこの法を貴ばざる。人はなはだ悪しきものすくなし。能く教ふるをもつて從ひぬ。其れ三宝にたよりまつらずば、何を以てか枉れるを直うせん。

十、こころのいかりを絶ち、おもてのいかりをすて、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り、心各々執れること有り。彼よしみすれば則ち我はあしみす。我よしみすれば則ち彼はあしみす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。よしみしあしみするの理、なんぞよく定むべけんや。相共に賢く愚かなることみみわのはしなきが如し。是れを以て、彼人はいかると雖も、かへつて我があやまちをおそる。我れ独り得たりと雖も、衆にしたがひて同じくおこなへ。

聖徳太子の和の悲願

社　説

今や世界を挙げて共産と民主の両派に分れて、北鮮に、南支に、北欧に火華は激しく散つてゐる。レイクサクセスに各国の代表は蝟集して和解への道を論議し、虚々実々、舌端焔を吐くものすごさである。然もその努力も影うすく米国大統領は遂に非常時態の宣言に及んだ。

日本は敗戰以來一切の武器を捨てて連合軍の占領下に復興を目ざして満五年を送つた。

昨年以來提案せられた講和の問題も何等かの形で本年は実現するであらうが、敗戰国としてはポツダム宣言をまめやかに履行する外はない。それはミズリィ艦上の降伏の調印以來当然うけねばならぬ我等の責任であり、業報である。

然し我国は世界の裁きの庭に立つてその裁断をうけてゐるのであるから、そのことをかれこれと言ふことはできないが、我等はただ手を拱いて居てはならない。

経済的な復興はもとよりであるが、百萬に余る戰歿者と今日なほ行方を求めて毎日ラヂオで放送される親や子や妻兄弟の痛ましい尋ね人の声を聞く我々としては、我等の將來進むべき、悔いのない根本の立場をよく自覚せねばならない。

長い年月の間ただ上からの天下り式の命令に順ふやうに習慣づけられて來た我々はとかく妥協的な卑屈な服從の旧弊から脱し難い恨みがある。このことは將來の大きな禍根となり易いことで深く省みねばならぬ。かと言つて徒らに自分の立場にのみとらへられた、ひとりよがりの独断におちることは、尙更対立と抗争を深めるばかりである。

我等はここに独断と無定見を排して眞実の和解の道を求め、妥協と対立を排して和光を仰がねばならぬ。そこに始めて我等の根本の立場が樹立せられる。

一、和を以て貴と爲す

世界は大動乱の前夜にあり、我国は明暗の岐路に立つ年頭、先づ我々の胸を打ち、旭日を仰ぐにもまして渇仰せられるのは親鸞聖人が「和国の教主」と崇敬せられ「恩德まことに謝し難し」と讃仰遊ばされた聖德太子の大理想であり、超世の悲願である。

太子は憲章第一の劈頭「和を以て貴と爲し忤ふことなきを宗と爲す」と高く掲げ、明らかに御示し下されてゐる。然もそ

の道一つひらけ來れば「上和ぎ下睦びて事をあげつらふにかなひぬる時は、事理自らに通ふ、何事か成らざらん」との大調和世界の建現と発展を御教へ下されてゐる。

さて省みて思ふに、人として眞の和を願はぬ者は一人としてなからう。弱肉强食、勝てば官軍、負ければ賊軍、力は正義なり、などの言葉は畜生界にのみ使はるべきであらう。それなのに我等の世界の実狀は、このあるべからざることが事実として現はれてゐて、人類三千年の歴史は常に血に染められてゐる。和の理想は唯美しい幻としてのみ存在してゐるに過ぎない。して見れば「和を以て貴と爲す」の太子の大理想も空文であり、そらごとであらうか。

太子も亦この現実の世相を直視し給うて「人皆党あり、達れる者すくなし。ここを以て或は君父にしたがはず、たちまち隣里にたがふ」と仰せられてゐる。我々が世に処すとき色々な関係から、相親しむ仲間が出來る、するとその仲間でない者には冷く遠ざかり、互に対立するやうになる。仲間に居りながらそれに執着されず内外古今に渡つて正しき智慧を持つ人は世に稀である。煩悩に濁らされて眞実の智慧のない我々は萬事につけて和することなく、整然とした秩序も見えず、從つてそれに順ふ心もなくただ渇愛の煩悩の動くままに互にそむき、たがひ、さからつて、遂には自滅する外はない。佛陀はこの我等の姿を「煩悩涯底なく、生死の海ほとりなし」とみそなはされてゐる。現に底のない、はてのない煩悩を身に具足した我等としてははるかなる末かけて、はてしない苦海の沈論がその定めであるときびしく教へ示されてゐる。

戰争の華やかな時は正義の名のもとに戰争を主張した我々が敗戰と共に一時に平和論者になつてしまひ、現在のやうな世界の風雲急を告げはじめると不氣味な沈默に帰つてしまふ。自分の利害を根とした平和論は、利害によつて戰争論者にもなる。さういふことを繰り返し、まき返してゐる我等をこそ「生死の苦海ほとりなし」と佛は仰せられてゐるのである。佛の仰せられ太子の掲げ示される「和」は時代と場所の如何によつて崩れない「和」である。その和の建現のためには一切の煩悩を滅却し去らねばならぬ。「丘にあり山にあり野にあるも聖者の居ます所は樂し」の境界である。然し熾盛な煩悩を具足せる身としては常に煩悩に敗けて了ふので、ちつとも勝ち拔くことが出來ない。「煩悩無尽誓願断」は佛教徒の共通の切なる誓願であるけれども鈍根劣機の身としては手も足も出ず、心も言葉も及ばぬことである。して見れば我等の切なる和の願も空しい。我も人も破滅より外はなく、内も外も大暗黑である。

二、篤く三宝を敬へ

太子は煩悩具足せる凡夫の世相、徒党相喰み相闘ふを悲しみ憐れみ給ふて、「篤く三宝を敬へ」と直指なされてゐる。

三宝とは佛と法と僧であるが、帰するところは佛宝一つである。即ち「篤く佛に帰依せよ」と御勧め下さるのである。

篤くとは、まじりけなく、ひとすじに、ふかくといふ。太子の悲願のそのままのぎりぎりの御言葉である。

その悲願のおこりは、「枉れる者」「悪しき者」「煩悩具足せる凡夫」、然も如何とも爲し能はざる者、和の理想は高く掲げられても「心の翼に身の翼が永遠にそはない者」、その者をこそ徹底してお見拔き下されて、その故にこそ、ここ一つは是が非でも心にいれて呉れるやうにとの悲心にある。

この道一つを御勧め下さる太子は、もとより御聰明な方であり、お偉い方であり、慈悲深い方であらせられたことは申すまでもないことで、親鸞聖人も観音菩薩の御化身として仰いで居られるが、太子御自らは「世に生れながらに知る者すくなし、よく念ひて聖となる」或は「共に是れ凡夫のみ」或は「愚心及び難し」と述べさせられてゐるやうに、愚者、悪人、凡夫としての御自覚に御立ち遊ばされて、常に我等と同座して下されてゐる。

又斯く太子が「帰依佛」を萬人に極力御勧め下さる根源は、太子御自身の御身証にもとづくのであつて、まつたく全身全霊をあげての切々哀々、まことにやむにやまれぬ御叫びである。

憶ふに太子は御年二十にして、日本最初の女帝推古天皇に懇望せられて太子の御位に即かせ給うたが、国は内憂外患、潮の様に寄せかへす秋、文化は全く低調にして日本の前途全く闇黑の危機であつた。御聰明な太子の御胸は如何ばかり激しく深く御悩み遊ばされたことであらうか。

狂乱怒濤の渦中に立たれた太子は、その解決の根本を、世の常のやうに外に求め給はずして、内に先づ求められた。このことは誠に大切なことで、現に大波瀾下にある一人々々が活目一番せねばならぬ大事な点である。何か問題がおこると我々は早速、あれがいかぬ、これがわるいと相手を自分の力でおさへやうとする。苦し相手が弱ければ一時は屈伏せしめることは出來るが、こちらの力が衰へるとはね返されてしまふ。上になり、下になりして、我等の歴史は「糞中の穢虫が居を争ふ」に似て、はてしない闘争が繰り返されてゐる。これが先づ外に求める者の結末である。内に求めるとは、事に当つて惑ひ、苦しみ、憤り恨むより外ない自分自身の解決の道である。

太子は御年二十二の御時、朝鮮渡來の慧慈、慧僧の両師に就かれて「学ぶこと二年、遂にその玄意を得給ふ」とあるから二十四から五の御頃、佛道の玄意を得られたと推察される。爾來御一生を貫ぬいて佛道を深く求められて、維摩経に在家信者の至極を得、勝鬘経に婦人信者の範を求め、法華経に老少善悪をえらび給はぬ一佛乘の大道を得給うて、佛智を頂き佛意を仰いで国是の根本は自然に樹立し、外交内治に縦横自在の御活動を遊ばされたのであるが、惜しむべし御理想の実現やうやく緒についたばかりの盛年四十九にして神去り給うたのであつた。

三、如來に調伏せられて如來に歸依し、法の津澤を得て信樂の心を生ず

「行善の義、本歸依に在り」とは太子の御言葉である。歸依から生ずる善は絵の上に膠したやうに消えないとも喩へられてゐる太子の不滅な御活動の本源も歸依に発したことは申すまでもないことである。

又佛法の大海は徹底した南無佛にひらける。佛道の玄意を得るとは徹底信に立つことである、金剛信の獲得にある。

さてこの眞実の歸依は如何にして樹立せられるのであらうか。太子は「如來に調伏せられて」と仰せられてゐる。又「法の津沢を得て」と示されてゐる。このことは誠に胆に銘じ心に徹する金言である。

我々は「佛も人なり、我も人なり」といふやうな大我慢を起して佛道を聞き始めるのであるが、丁度「孫悟空が存分に空中を飛んで、もう大分佛から遠ざかつたと思つて休むと、矢張り佛の手掌の中であつた」との逸話に似て、虚空の如く広き御智慧と巨海の如く深き御慈悲の力に、我身の駄目さが漸く知らされて、遂に調伏せしめられて了ふのである。

又あらゆる縁を通じて目に耳に心に、佛語が滲み透つて下さつて、たとへ一時は忘れ去つてゐる様でも、又何かの縁の催しをうけて成る程さうかと大いに肯づかせて下さるのである。津と言ひ沢といふのは常に水のじめじめと潤うてゐる場所である。佛法の常に潤うて下さる御力によつて遂には広大な佛の御眞実がとどけられて信樂の心が生じるのである。

丁度親を親とも知らぬ嬰兒も四六時中常に護り常に育んで下さる通ひづめの親の念力に催されて、信ぜずには居られなくなり、疑ふ余地が一点もなくなるのと同様である。

○釈迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を発起せしめ給ふなり。

○慈光はるかにかぶらしめ、光の到る処には、法喜を得とぞのべ給ふ、大安慰を歸命せよ。

○若不生者の誓ゆへ、信樂まことに時到り、一念慶喜する人は、往生必ず定まりぬ。

以上の祖聖の御和讃は、如來善巧の大悲に調伏せられて如來に歸依せしめられる姿がありありとうかがはれる。

篤信の父王ビンバシャラを縁として阿闍世王子の身にすでに佛の慈悲は注がれてあつた。然し野望家提婆のそそのかしにあつて阿闍世の心は煩悩に狂ひ、瞋恚に燃えて、母を幽閉し、父を殺害し、佛を謗り、遂に五逆の罪におちた。然しその不幸の底にあつて母偉提布は彌陀佛の本願に帰して廓然大悟の身となり、母偉提の心に点ぜられた慈光は遂に阿闍世を大懺悔の人と轉ぜしめ、佛弟子であり名医であり、縁戚にあたるギバ大臣に導びかれて阿闍世王は佛の前に進み佛の大慈悲に調伏せられて「無根の信」を獲るに及んだ。

この阿闍世の姿こそ、法の津沢に潤ひ、如來の調伏を蒙むる我等の姿である。

「如來に調伏せられて」「法の津沢を得て」と仰せ下さる太子の御目にも、懺悔と感謝の涙が滲むで居られるのを拝する。太子は幼にして南無佛と称へ給うたと伝記に誌されてある。太子は幼にして南無佛と称へ給うたと伝記に誌されてあるやうに、太子御出世の当時すでに佛教は流布され、御父君陽明天皇も亦尊崇してをられたので、太子の御佛縁は誠に深いものがあつた。然しそれが御自身の御事として太子が御自覚の域に到達されるまでに雑多な現実の問題が山と積まれてゐた。国家が累卵の危きにあり、將來の見透しもつかぬこともさることながら、一番太子の御心をお傷め申したのは蘇我氏に対するの問題であらう。物部氏を滅亡せしめた蘇我氏の権勢はならぶものなく、御叔父君の崇峻天皇は蘇我氏を非常に憤られて、つひ語られた恨み言が禍根となつて遂に殺害せられ給うた。

太子は女帝推古天皇の下にあつて仇敵蘇我馬子と共に政治の枢に当られたのである。太子の御胸中は狂はむばかりの憂憤の焔と燃えられた御事と拝察する。太子が若しその本能の燃えるがままに武器を執られたとすれば、太子と共に国は破滅したであらう。かと言つて爲すこともなくそれを傍観されたのであれば蘇我氏の横暴はいや益すばかりである。又問題から逃避されたとしたら太子の自殺への道である。ここに立つ時八方塞がりで萬事窮するの外はない。

四、共に是れ凡夫のみ

大暗黒裡に乱れ狂ふ煩悩に行方の知れぬ大苦悩に立たれてゐる太子の御胸に、如來調伏の御手が延びた。「共に是れ凡夫のみ」のきびしい御声である。蘇我氏が悪い、馬子が横暴である、不倶戴天の仇であると、太子の御胸に瞋恚の焔の燃え盛るところに「馬子も確かに悪いひどい人間でありますが、然しそれかと言つて、そのために怒り狂ひ給ふ太子御自身も亦駄目な人間ではありませんか」と佛のおこころがとどいたのである。大海は如何に濁つた河水をも容れて、やがて澄ませて了ふ。我等に若し大海の如き眞実の誠があれば如何に悪い者をも遂には轉化して了ふに相違ないが、我等には相対のまことしかない、相手の出方一つで崩れるまことしかない。崩れ壊れるまことであれば眞のまことは言はれない。向ふもまことが無いがこちらもまことは無いのである。

太子の脚下は明らかに照らし出された。相手ばかりが悪いと思ひ込まれてゐた太子に、太子御自身も悪いと自照せられたのである。太子の常の仰せ「世間虚仮」の一句はここに発祥する。「九十五種世をけがす、唯佛一道清くます」との祖聖の和讃も、立てたうてならぬ自分を立てる教を分類すれば九十五種となる、それでは結局不徹底で行き詰る外はない。

唯一つ立てたうてならぬ自分自身の駄目さを徹底して自照して下さるのが佛道一つであるとの意味であらう。

さて駄目を駄目と自照させられるとはどういふことであら

うか。我々は駄目とは思ひ度くないのである。思ふことも出來ない、何か出來ると夢みて居なければ安んずることは出來ない人間である。生命よりも大切な自分の立ち場を投げ出すことの出來るには、唯一の道がある。即ち、駄目を駄目と見拔かれて、然もその故に無限の慈悲をもつて向つて下さる方にあふ外はない。「唯佛是眞」とは、「その方が佛なり」との仰せである。

五、和の建現

如何に濁り汚れた水も、無限に清水をそそがれることによつて、おのづから清め澄まされて行く。如何に煩惱の亂れ狂ひ行く身も、無限の慈悲を常に注ぎ下さることによつて自然にやはらぎ、やすらうて行く。

和に向つてのあらゆる努力も精進も無力無効であるばかりでなく、むしろ自分自身が和を乱し忤うて行く身であると自照せしめられるところに、不可思議の佛力によるやはらぎの道が與へられる。お惠み下される和である。お與へ下される和である、何といふ貴き和であらうかこれが「和を以て貴となす」の太子の御こころと拜する。

和光一度輝くところ「人はなはだ悪しきもの尠し、よく教ふれば從ふ」とも「彼人いかると雖も、かへりて我が失をおそる」の道も自然に見える。然も「何の世、何の人かこの法を尊ばざらん」と古今に通じ中外にもとることなき、大道が坦々としてひらけて來る。

開眼された太子の御目に「日域大乘相応の地」と映じ、先づ法隆寺に学問所を建て給ひ、佛の慈悲の具現として四天王子に施藥、悲眼等の社会救済事業も創設され、有縁の各地に寺院を建立されて、諸佛に護られ、佛心に莊嚴される国土の建設にいそしまれたのであつた。

嗚呼聖德太子逝きまして千四百年、流來流去する世間の風潮によつて一進一進はあつたが、現に各大学に宗教、印哲、佛教は講義せられ、形骸のみとは言へ寺院は各地に高くそびえてゐる。又極く小数ながら篤く佛心に帰しまつつて家庭を莊嚴し、村に町に不滅の灯を掲げる人々もあり、或は学舎にあつて大いなる感化を與へて居られる教育者もある。これ全く太子の世に超え給ふ大悲願の賜である。我等太子の海山の浩恩慈育を蒙むる者、富める者は財を、力ある者は力を、智ある者は智を、所謂、身、命、財をつくして太子の大理想の顯現に奉じ、日本のよつて立つ根本と世界への大使命の遂行に邁進せんことを、掲げ示して下さる太子の悲願の前に伏して誓ひ奉ることである。

× × × ×

不和に對する世尊の慈訓

花田正夫

一、教團内の不和の問題

憶ふに佛陀を中心とした佛教教團の大きな特長は和合にあつた。世尊の慈悲と智慧の圓満された無我な大人格のもとに集うて道を修める比丘達は、自然と「上和ぎ下睦ぶ」の德風に浴してゐた。相寄り相扶けて、上下四囲の秩序もまたよくととのひ、大自然の運行の一絲乱れぬ大調和に比ぶべきものがあつた。

ところが佛陀がコウサミ国に遊行中に不祥事がおこつた。或比丘が些細の罪を犯したのがもととなつて、佛弟子が二派に別れて相反目し、夫々に味方を求めて遂には相爭ひ相鬪ふまでに事態は悪化し溝は深くなつた。

対立抗爭の根本は、洋の東西を問はず、時の古今を簡ばず、皆五分と五分の相対「我是なり、彼非なり」の我執我慢に縛られておこる人情の食ひ違ひである。一方は「罪を認めぬ」と言ひ張り、他方は「罪を認めぬとはけしからぬ」と責め立てた。

佛陀はそのいづれもが非であることを懇ろに說き訓へられたが、中心人物達は口を揃へて「世尊よ、しばらくお待ち下さい。世尊は世尊の禪定を味はうてゐて下さい。この爭や不和は私共が責任を負うて片付けるでありませう」と我執を何処までも捨てないで不和は益々大きく拡がり深刻になるばかりであつた。

（註）私はここに大きくは世界の対立鬪爭から小さくは家庭問題の紛爭に到るまで「我是なり彼非なり」を中心にして修羅場化してゐることを思ふ。然もさうした邪見に立ちながらそれをそれと反省もせず常に「自分の責任をもつて解決するのだ」と我執をつのらせて佛意を聽かうとしない。甚だしいのになると「佛教などの出る幕ではない、宗教は個人だけの問題だ」と言ふ。又所謂の形式信者達は、「信仰は死後の極樂参りのこと、現実の生活は自分で処理せねばならぬ」と佛を敬遠して了つてゐる。又或る種の人達は、宗教を利用してうまく現実をおさめて行かうと言ふ考の人もある。だから多少でもうまく行くと佛の御蔭となり、反すると宗教も駄目となる。元來邪見と我慢のかたまりである我々はどうやつて見ても行き詰るより外にはないので、その故にこそ何一つとしてよるべのない我々に御本願があらはれて下されてゐるのである。「何事か爲し得べしとの

夢さめて　あやまりはててそこに道あり」との篤信者の歌は、そこを深く味はつてゐられる。

さて佛陀を敬遠して我慢を根として我執に終始する比丘達を佛はみそなはされて大悲やむことなく、長壽王子の説話を以て訓へ給うた。即ち勢力の熾んな梵達王は弱国不振の隣国の長苦王の国土を奪ひ、更に王とその妃を捕へて死刑に処さうとした。かねてこのことあるを怖れて別居してゐたため難を危く逃れた長苦王の子、長壽王子は群衆に雑つて死地に索かれ行く父王と母后を見送つて、自分の若冠無力の身を歎き、仇敵復讐の火と燃えて血涙にむせんで傍観してゐると、速くも長苦王は群衆の中に吾が王子を見出してそれとなく独白して王子に告げる。即ち「長く見るべからず、短く見るなかれ。恨みは恨みによつて消えず、恨みは恨みなきによりてのみ靜まる」と王の生命の絶えるまで繰り返された。

然し王子の憎しみと怨みは消えず、処刑後群衆の去つた夜番人に酒を飲ませて遺骸をはこび懇ろに葬つて復讐を誓つた其後王子は巧みに梵達王の身辺に近寄り忠実と聰明さによつて信頼を一身に集めた。或日狩獵に出た梵達王は疲れて近侍の長壽王子の膝を枕に深き眠りに入つた。時節は遂に到來した。長壽王子は懐中深く秘めた短刀を抜き一刺に怨をはらさうとした時、王子の目に耳に、父王の臨末の遺訓と悲痛な姿がありありと浮んで刀を下すことが出來ないで、遂に刀を懐中におさめた。その時である、悪夢におそはれて汗びつしよりとぬれた梵達王がはね起きて長壽に向ひ「ああ怖ろしい夢を見た。今自分は自分が殺した長苦王の王子に捕へられ殺される夢を見た」と告げると、長壽王子は懐中の短刀を投げ出し、「実は自分がその王子である。今王を一刺にしようと企てたが亡き父の遺訓にさまたけられてどうしても果せなかつた」と懺悔すると、長苦王の眞意を始めて知つた梵達王は、自分の非を深く懺悔すると共に、長壽王子に国を返し、妃も與へて無二の親交を結ぶやうになつた、と。

まことに懇切な御慈訓である。然し佛弟子はこの訓戒を聞きながらも煩悩の焔はなか〳〵おさまらず相変らず「佛陀よ心安く独り禪定を楽しむで下さい。私達は私達の責任において解決します」と答へて佛意を承けなかつた。

（註）佛は相手の間違つてゐるのを見抜かれて、憐み悲しみ育くまれてやまぬのであるが、佛弟子は相手が間違つてゐるときめて憤り責め争うてゐる。「心のいかりを絶ちおもてのいかりを捨て、人の違ふをいからざれ」の聖德太子の憲法がここに想ひ浮ぶ。相手の間違ひを見ていかり腹立てることがすでにあさましいことである、こちらに眞実がちつともない証拠である。世間の修養の教と全く相違する、世間では「相手がそんなひどい人間なら腹が立つのはもつともである、然しそれでは互の破滅であるから、ならぬ堪忍するが堪忍」と教へ「腹が立つのは勿もだ無理ない」と許して、それをおさえることが善であり修養の出來た人といふ。これでは人間の力に限りがあるので何時かは爆発しぬれた梵達王がはね起きて長壽に向ひ「ああ怖ろしい夢を見

てしまふのが落ちだ。

相手の間違ひを見ていかることがあさましいことである。眞実のない証拠で煩悩に狂ふ姿である。「眞実とは何処までも間違ふ者を捨てず、やがては眞実に轉じてしまふ」ことでなければならぬ。然し私共にはさうした実意は微塵もない、さうした心で出発しても程なく駄目になつて了ふ。恨みなき心になり得ないで常に煩悩に惑ひ続けて寸時もやすらふ時はない。それでゐて「自分の責任で解決出來る」との佛弟子の姿こそ、よき鏡として私の自性を映して下さる。遂に佛陀は「最後の叱り」の道を選ばれた。即ち法を説くことをやめられ、コウサミの精舎を去つて、舍衛城の祇園精舎に帰られた。さて教團の紛争と不和が続いてゐても、未だ佛陀の被護の下にある間は大衆の供養と尊敬が比丘達に惠まれてゐたが、佛陀が独り遠く去られたことを知つたコウサミの人達は、「世尊の去り給うたのは不和の比丘達のためである。この比丘達は我々の不利となる人達である」と口々に悪罵して供養と尊敬の一切を捨てた。

紛争を長く続けてゐた比丘達も、水から離れた魚のやうに、あはてふためいて、世尊の許で争を靜めやうと、座具を片付け衣鉢をとり、舍衛城に向つた。

舍衛城では舍利佛を初め多くの比丘達がコウサミの比丘を如何に取り扱ふべきかを世尊に御尋ね申した。世尊は「如法者につくべし」と示し給ひ、独園長者を始め多くの信者達にも「平等に供養するやう」に教へ給うた。

コウサミの比丘達は舍衛城に入つて先づ罪を犯した比丘がその罪を自覚し初め、責めた比丘も非を知るやうになつて、比丘達の心も和いで、世尊の御前に互に懺悔して和解した。

（註）「我是なり彼非なり」の我執を本として、相対虚仮の善と相対分別の我見に曇らされた智をたのむで何一つ解決出來やうはづはない。出來ないことを出來ると思ふところに迷ひがあり、出來ないまんま改めやうとしないところに我慢がある。かくして一切の味方を失つて永遠の暗黒に陷ちねばならぬ我等を佛はよく御照覧遊ばされて、一人一人が一刻も速かに寸時も早く佛陀の慈懐に帰する日を如何ばかり待つて居られることであらうか。法華経の「長者窮児」の比喩に放浪の子の帰りを待つ悲心切々たる親なる長者の心を述べ給ひ、「火宅三車」の比喩では寸刻もほつておけない烈々たる悲心をお示し下されてある。

佛陀は「衆水の海に入りて一味」となる如く衆僧和合し一致するのを見られて、「比丘は互に慈みの行、慈みの言葉、慈みの思が大切である、それには、神聖にして苦しみのなくなる見解が主とならねばならぬ。その見解とは正見であつてとらはれのない所にあらはれる佛智である。若し何かに捕はれると子供が火にさはつてすぐ手を引くやうに懺悔し改めねばならぬ」と懇ろに説かれ、最後に「諸比丘達の永遠の幸福のために、佛に対して友としての行を以て從ひ、敵としての行があつてはならぬ。敵としての行とは、佛が慈悲をもつて道を説いても、耳傾けず、あきらかに聞かず、佛の教から離れ去ることである」と結ばれてゐる。

二、水爭ひの問題

佛陀が成道遊ばされて第四年目のことである。その年の五月、干魃が永く続いて河水は殆んで涸れ、田畑の灌漑に非常に困難した。ここに、カビラ城と、コウリ城との間に、その中間を流れるロヒニイ河について、大きな水の爭奪が行はれた。

初めは水の缺乏から互に悪口をする程度であつたが、遂には棒を取り劍を拔いて互に血を見るまでに到らうとした。

世尊はこれを聞かれて急ぎカビラ城に歸りまさに戰を交へんとする兩軍の眞中に立ち給ふた。「世尊、世尊」の声が兩軍の中に起り「今世尊を見奉つてはどうしても敵に矢を放つことは出來ない」と人々は皆武器を投げ出した。

世尊はそこで兩軍の首領を集めて「人の生命とくらべて水は如何ほどの価値があるか。僅かの価値しかない水のためにこの上もない尊い人の生命を滅してはならない」と諭された

（註）「物に軽重あり、事に本末あり」とは道に達した人の目にのみ写る秩序ある境界である。佛陀の御目には生命を何よりも尊くかけがえのない宝としてあがめられてゐる。

一切悉く佛性ありとのらせ給ふ佛陀は、生命さへあれば如何なる者も必ず成佛出來るとの御確信がまします。佛陀降誕の日、「天上天下唯我独尊」と仰せられた中には、地上にお生れ下さつたことの尊嚴さを讃へられた意味が多分にあると思ふ。

「人身うけがたく今すでに受く」と言ひ「夫れ人間に生れたることは大なる慶びなり」と古聖も貧富、善悪、貴賤を問はれずして世に人として生まれたことをこの上ない慶びとして居られる。

大經の五悪の第一は殺し合ふことで、最も深く佛が悲み誡められてゐる御心がうかがはれる。憶ふに眞の意味における生命の尊さは人が如何なる者も佛に成り得る点においてである。常不軽菩薩が一切の人々に合掌されたのもその故である。「あなたも佛に成る人」としての尊敬であつた。

法藏菩薩の本願「若し生れずは正覚とらじ」との切なる志願は、遂に成り就られて「十方衆生の往生成佛の道成就せり」との彌陀佛の正覚の声と轉じて下されてゐる。して見れば如何に愚かに罪深くとも、思ふことかなはずとも、生命を大切に聞法せねばならないことを自照せしめて下さる。

佛は次に大衆を集めて次の巧みな比喩を説かれた。

昔山の奥に黒皮の獅子がバナタ樹の根本に棲んでゐて獲物の來るのを待つてゐた。或日風のために樹の枯枝が折れて獅子の背に落ちた。獅子は敵の攻撃と思つて、驚きふためいて逃げ出したが、後から何者も追つて來る氵配がないので振り返つて見ると枯枝が一本横たはつてゐるのみであつた。

これは樹の神が自分を憎み、追ひ出して他の獸に宿を與へようとしてゐるに相違ないと非常に立腹して立ち返り、樹の幹に嚙みつき「自分は葉一枚も食つたことも枝一本折つたこともない。それなのに他の獸にはこの場所を許して自分だけ

を許さない。この怨みは必ず果してやる」と罵つて去つた。

其後黒獅子は山中で車作りの大工が木を切りに來たので早速バナタ樹の在場を教へそれを切らせやうとした。大工は非常に喜んでバナタ樹を切り始めると、樹神も驚ろいて姿を現し「お前はこの樹を切つて車を作るであらうが、その車の輪に黒獅子の頸の皮を張りつけると非常に丈夫なものになる。あの黒獅子を殺して皮をとるがよい」とそそのかした。大工は樹を切りその足で黒獅子を殺して村に持ち歸つた。

（註）この説話にあるやうに、我々は煩悩に眼障へられて、物の眞相を見拔く力なく、一寸したつまらぬ誤解がもととなつて互に憎み合ひ罵り合ひ、果ては殺し合うて自滅せねばならぬ。自ら墓穴を堀りながらそれを氵付かずして、一瞬にして陷沒するのである。危い哉、危い哉、我等の足下に自他共に落ちねばならぬ千仞の奈落がある。

佛陀は更に次の説話を加へて大衆に徹底せしめられた。

昔一匹の兎が棕櫚の籔の中に永く棲んでゐた。或日兎はふと「この世界が壞れたらどうしたものであらうか」と考へた折も折、木の実が棕櫚の葉に落ちてガサツと音を立てた「すはこそ世界が壞れかかつた」と兎は懸命にかけ出した。他の兎もそれに続いて「それは大変」と敗けずに逃げる。遂には数千の兎が走り、鹿が加はり猪も水牛も虎までが加はつて世界の破滅を怖れて逃げ走つた。

その時一匹の獅子がこれを見て、私が傍観して居たら彼等は皆滅亡して了ふであらうと氣の毒に思ひ、逃げ惑ふ彼等の前に立ち大声で孔え上げた。そこで先頭の兎が停り、次から次へと何萬の獸が同様に立ち停つた。獅子は其の眞中に進み「何故逃げるのか」ときいた。「世界が壞れかけたから」「誰がそれを見たのか」「象が知つてゐる」「猪から聞いた」「鹿が言つた」と次から次へと元に戻つて第一の兎が見たと分つた。

獅子は大体見当がついたので獸の群をそこに待たして棕櫚の林に行き、そこに落ちてゐた木の実を拾ひ「これがもとだ」と知り彼等の怖れを除き去つた。若しこの獅子が居なかつたなら無数の獸は逃げ走つて海にはまつて藻屑と滅びたに相違ない、と。

佛陀はかく語り終られると共に「人々は正しい理解を持たねばならぬ。つまらぬ誤解がもとで萬人それに同じて悲惨な最後を招いてはならぬ」と訓へられた。兩城の人々はこの佛の説法を聞いて大きに随喜し、又多く佛門に入る人々も出來た。

（註）「東風吹けば枯葉の西にたまりけり」で、説話中の百獸同様な無自覚な、ぴくぴくした生活をして居る自分の姿が照し出されて慙愧に堪へぬことである。それにしても獅子の智慧は不可得にしても、佛の光明下に照護せられて、淨土への旅を続けさせて頂く道は拓かれてゐる。

祖聖親鸞は「信心の智慧に入りてこそ佛恩報ずる身とはなれ」或は「智慧の念佛うることは法藏願力のなせるなり」と佛の慈光に攝護せられて行くままが佛の正智を頂いて行くことであり、そこに金剛不壞の道、無碍の一道あることを教へられてゐる。

善人と悪人

福島政雄

「善人なほもて往生をとぐ、況んや悪人をや」といふのは歎異抄の上で私共が戴いてゐる親鸞聖人の御言葉である。

「罪人なほむまる、いかに況んや善人をや」といふのは勅修法然上人行狀絵図の中に出てゐる上人のつねに仰せられける御詞といふのである。

此の二つの御詞はまるで反対のやうにきこへる。法然上人の御言葉は所謂常識を以て受取られ得るけれども親鸞聖人の御詞は常識の上から受取り難いやうな感がある。これはどう考へたら宜いのであるか。

尤も親鸞聖人の御詞も人の親が子を思ふ心といふ上から考ふれば極めて常識的にわかるやうでもある。親心の上では悪い子ほど痛切な問題となる。善い子は放つて置いても宜いが、悪い子には千々に心をくだく。それで善い子でも助けようと思ふ親は悪い子であればなほ更何とかして助けたいと思ふ。これは親心としての常識である。そして佛陀の上に此の親心を感ずるとなれば親鸞聖人の御詞のとほりである。

併しそれは佛陀を久遠の御親として吾々が佛心を忖度してゐるといふことになりはしないか。聞けば尤もだとは思ふが、吾々自身の立場はどんなであるか。善い子になつて甘へやうといふのか、悪い子として心配をかけて行かうといふのか。

佛陀に対して吾々は子である。子たる吾々には自分を善い子だと思つてゐるのか、悪い子だと思つてゐるのか。又吾々はお互に毎日善いとか悪いとか言ひ合つて暮してゐるが、対等関係で自分は悪いと思つてゐるものがあるのであるか。遠慮なく言へば吾々は自分を悪いとは決して思つてゐない。悪い点もあるとまでは思つても自分が全然悪いなどとは決して思はない。悪い点があつてもこれを辯護して勿体つけようとする。即ち吾々は自分を善人と思はうとしてゐるのであつて自分は悪人だといふやうな自覚は持つてゐない。

佛陀の前へ出ても善い子で通さうとする心持である。たまたま自分は悪人だなどと人の前で言ふことはあるが、併しそれは「いやあなたは悪人ではない、善人だ」と言つて貰ひたいといふ下心があつて自分は悪人だといふのである。これを釣錢を求むる心と多田鼎先生は言つて居られた。吾々は釣錢を求むる心が止まないのである。

斯様な吾々の現実相から考へて見れば、法然上人は実に素直なお方であつたと思はれる。御自身が悪人であるといふことを素直に自覚せられたのである。

私の法然房といふ御持言は実に尊い。それで「罪人なほむまる、いはんや善人をや」と仰せられるときに、罪人といふは御自分のことを意味し、善人とは他の人々を意味する。そこに法然上人の圓満な御人格がはつきりと感ぜられる。

然るに親鸞聖人はよほど趣が違ふ。聖人の御自覚は自分は偽善者であるといふ御自覚である。

賢者の信をききて、愚禿が心をあらはす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。

此の告白は自分が偽善者であるといふ告白である。内は愚かであつてもその愚を愚としてあらはすことの出來ない者、賢者振る見栄坊であるといふ告白である。

浄土眞宗に帰すれども眞実の心はありがたし。

虚仮不実のわが身にて清淨の心もさらになし。

外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ。

貪瞋邪偽おほきゆへ奸詐ももはし身にみてり。

貪瞋邪偽の悪性は賢善精進の相を外に現はす、その偽善者は正しく自分であると告白せられる。自分に悪を認めてもやはり善人顔をしたい。結局自分は善人だとしか思へない。

自分の偽善は正に病膏肓に入つてゐる。これが聖人の告白である。

此の告白に接すると私如きものは、これこそ私の姿そのものであると感ずる。口ではどんなうまいことを言つて信仰などを説いてゐても、現実問題に突き当るとなかなか素直に自分が虚仮不実であるとは感ぜない。自分は大いに善いつもりでゐる。それで人に対して瞋恚を起す。

此の自分の姿からふりかへつて歎異抄を読めば「善人なをもて往生をとぐ、況んや悪人をや」の善人とは、自分のことを善人としか思へない私のことであつて、悪人とは素直に悪人の自覚に入つた人のことである。

併し佛陀の大悲はその仕方のない善人顔する者を徹せしめたまふ。人生における善悪の爭ひが永遠につづき、始終対立してゐる五分五分根生の私どもの性根を根本から融化し、善も善にあらず、悪も悪にあらず、所謂人生の善悪を超脱する彼岸から此の迷ひの岸へ無限の慈悲と智慧とを廻向したまふ。そこに偽善者も内面に徹し、悪人の自覚あるものはもとより内面に徹する。内面に徹するといふは「他力をたのみ奉る悪人」といふ境地が開けることである。此の悪人は善悪相対の悪人ではない。絶対のまことの光に照射せられて沁み〳〵と自分の姿に涙する悪人である。絶対善に融化せられて行く悪人である。

「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまゐらせば自然の理にて柔和忍辱の心も出で來べし」といふ境地が開けようとする悪の自覚の境である。

ここに聖人の教が吾々の生命に徹して來るのである。

編集後記

歳旦を先づおとづるる念佛かな

―池山栄吉先生―

歳旦起き出でられた先生が、家中の誰にも挨拶されない前に、南無阿彌陀佛と御本願のおとづれをうけられた刹那の御感想であつた。

誌友の皆様方を始め諸先生方に先づ年頭念佛の中にお祝ひ申上げます。本年はまことに世界の風雲急を告げる年頭であります。年末以來私の胸に去來してやまぬ、世尊の慈訓と太子の悲願を誌しまして御膝下に送らせて頂きます。

又皆様方の御念力に護られて私の病氣も一応安定の域に達しました。然し相変りませぬ蓬戸不出の生活ですが、第一日曜と第三日曜の午後一時から日曜講話を始めさせて頂き又第二日曜の午後は歎異抄の輪読会を開かせて頂きます。御來会を御待ち申してゐます。

○

△「善人と悪人」の福島先生の御原稿は先月号の補足として、歎異抄第三條のこころを御身証下さいました。ことに「自分を悪人と思ふか善人と思ふか」の一語は、一角悪人がわかつたとか愚かに氣付いたとうぬぼれてゐる私共に大きな鉄鎖を加へられた思ひがいたします。

花田記

良書紹介

「自照」　月刊雑誌、誌代　一部十円、送料三円　一ヶ年　百五拾円（送共）

京都市右京区山内御堂殿町一五、自照舎。

白井先生、福島先生、足利淨圓先生、甲斐和里子先生が主に執筆せられる法味豊かな雑誌であります。

慈光第三卷第一號　昭和二十六年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

昭和二十六年一月十日印刷
昭和二十六年一月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價　一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼發行人　花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人　本田政雄

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
一道会館
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番